
DORAGONOID 《ドラゴノイド》

blurd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴノイド

DORAGONOID

【Nコード】

N3867V

【作者名】

blurd

【あらすじ】

天涯孤独の少年シリアは、平凡ながら楽しい生活をおくっていた。

しかし、突如現れた謎の男ジルにより、自分は人間ではないと告げられ……

光と闇は相交わり安息の時は幕を引く

「起立！ 礼！」

ありがとうございます！

クラス全員の声が重なり、今日の授業はすべて終了した。生徒達は後ろにあるロッカーめがけて歩き出す。しかし、後列にいる一人の少年はロッカーを見向きもせず、大きく伸びをしていた。

「あゝ……終わった……」

シリア、十三歳。

今日は待ちに待ったことが一度もない、期末テストの日だった。

シリアはいくつもの箇所飛び出た、文字通り無造作ヘアの髪型を、時たま　　というか五分に一回の割合でかきながら受けていたため、純血の色に染まった髪型は、さらにぼさぼさになっている。

いや、純血の色というのは、本物の血が染まったのではなく、単に生まれつきそういう髪の色というだけだ。

しかし、ぼさぼさになった髪犠牲も空しく、テストの結果は最悪だった。

分かつてはいたが、やはりむかむかする。こういうときは寝るのが一番！　と何時か読んだ本に書いてあった……気がする。そのへの記憶はあいまいだが、とりあえず寝てしまえ！　半ばやけくそになった　シリアは背中を丸め、ふて寝し始めた。

「おい、シリア！　なに泣いてんだ！？」

背中にバツシーンと衝撃がはしる。「いつてえ！」と叫び上体を起こすと、そこには見慣れた顔があった。

「なにすんだ！　レン！」

シリアが背中をおさえながら講義する。

「お前が呼んでも起きねえからしかたなく叩いてやったんじゃねえか。少しは感謝しろ！」

レンと呼ばれた少年の髪は、シリアとは対照的でくせ毛一本も無い、いわゆるストレートパーマと言うやつだ。目つきは鋭く、初めて会った人なら思わずたじろいでしまうだろう。だが、性格は律義で人情が厚い。皆に好かれるタイプである。少々乱暴だが。

「叩き起こすのにも限度があるだろ！ 少しは考える」

「あーあー分かったよ、今度から考えるから」

しかめっ面で息巻くシリアに、レンはめんどくさそうに両手で怒り and 和らげる。

この二人、こう見えても親友で同じ孤児院に住んでいる。シリアが孤児院に住み、最初に出来た友達なので信頼も高い。

背中が痛みがようやくおさまったシリアは、あらためて周りを見渡すと、教室の中はシリアとレン以外だれもいなかった。

「あれ？ もう帰りのホームルーム終わったのか？」

「とつくに終わってるよ。帰りの用意はしといたから早く帰ろうぜ」
そう言っただけはシリアのエナメルバックを差し出す。「いこうぜ」と小声で言うと、レンは教室を後にした。

シリアはレンの背中を見て、啞然とした表情を浮かべた。

「レンの奴……俺がおきるまでまっていたのか……」

もちろん口には出さなかった。

「ただいまー」

孤児院の玄関をあけると、初老の女性が真っ先に「おかえり」と言ってくれた。この孤児院の寮長だ。

パツと見たと三十から四十代に思えるが、実際は五十代前後の女性だ。寮長は、この孤児院の責任者で、だれでも優しく穏やかに接している。生徒達は、この寮長を愛情をこめて、「お母さん」とよんでいた。

「で、どうだったの？ 期末テスト」

ギクッ！

二人同時に硬直。この様子だと、レンもシリアと同じ結果らしい。

緊迫な表情の二人に、寮長はいたずらっぽい表情を浮かべると、
「あまりよくなかったんでしょ、二人とも。分かってるわよ、そんなこと。今度頑張りなさいね」

寮長の言葉に、二人はホッと胸をなでおろした。それからシリアはとレンは、自分の個室に戻るために分かれた。

この孤児院の生徒数は五十八人。その生徒一人一人に個室が設けてあり、おもに寝室の役割をしている。

シリアは、いつも通り個室に戻ろうと、玄関を左折し、ホテルのようにないくつものドアが左右に設置してある第二廊下に歩み寄る。

ポケットの中から鍵を取り出し、一〇七と彫られたドアの前に立つと、ドアノブの中央に鍵を押しこんだ。ガチャリと音がしたのを確認すると、鍵を引き、ドアを開けた。

「え？」

目の前に映った自分の部屋を、異常と思うのに数秒もかからなかった。部屋の中は、机やベットなどが置いてあり、いつもとんなら変わりは無い。しかし、それを通常と呼ぶには無理難題なことだ。

そこには見知らぬ男が立っていた。背を向けているため素顔は分からない。しかし、これだけは確実に言える。

こいつは危険だ。

男はゆっくりと振り返る。シリアは反射的に身構えた。こいつが危険なのは本能的に理解できる。部屋の鍵は自分が持っているはずにもかかわらず部屋に侵入しているのは強盗の類だろう。シリアはそう考えていた。

しかし、男の口から出た言葉は強盗が口にするものからは縁遠いものだった。

「初めまして、覇龍シリア…… お向かいに上がりました」

偽りが今の全てなら今までの出来事はなんだったのだろうか（前書き）

今回から文字数がぐんと減ります。

偽りが今の全てなら今までの出来事はなんだったのだろうか

「だ、だれだよ……あんた……」

ようやく振り絞りだした言葉がそれだった。声は震えてる。あたりはまだ。いきなり現れた男に「お向かいに上がりました」など言われたら混乱するに違いない。

男は振り返り、シリアに向かってふかぶかと礼をした。

「名乗り遅れました。私の名はジルと申します。 シリア・アストラル」

突如自分の名を呼ばれたことに、シリアは一瞬目を見開いた。だが、すぐに男 ジルをキツとにらみ、

「あんた誰なんだよ。どうしてオレの名を知ってたんだ」

と、凄んで見せた。だが相手は微動だにしない。それどころか微かに笑っていた。

「名を知っているのは当たり前でしょう。大切な、同胞なのですから」

「同胞？ ということだ！」

「同胞は同胞。そのままの意味です。……もつとも、記憶を失っているあなたには、なんのことも分からないでしょうが」

記憶を失っている。その言葉に眉がピクリと動いた。そう、シリアには幼少時代の記憶が無い。記憶がかるうじて残っているのは、寮長 養母が、この孤児院に連れてきたことまでだった。「 あなたは、この世に地が繋がった人間がいない、天涯孤独の身」

「……知ってるよ。だからなんだってんだ。今オレには家族がいる。血が繋がっていなくても、オレの大切な……家族だ！」

拳を握りしめ、そう叫んだ。自分には血のつながった人間がいない。そのことをシリアは封印していた。一度でもそう思ってしまった**は**ば、養母が、友達が、どこか遠くにいつてしまう気がしたのだ。

「そう思ってるのは、あなたただけだ」

その言葉を聞いた瞬間、頭の中の何かが弾けた。

「お前に何が分かる！ 母さんは……この孤児院の人たちは、オレを家族だと慕ってくれた。両親は……オレが生まれた直後に死んだ。天涯孤独だったオレの身を、寮長は引き取ってくれたんだ。オレを……家族といってくれたんだ！」

一瞬の静寂。その静寂は、ジルの一言より砕けた。

「違う」

「……え？」

「今の話だと……あなたには家族がいたということになります。違いますよ。あなたに家族がいるわけがない」

「どういう……ことだよ……」

ジルはシリアは一心に見ると、ゆっくりとその口を開いた。

「あなたは人間ではない。生まれは天により君臨する帝雲、ドラグル・ク龍仙地ラウド」

そしてあなたは、そこに住まう人知を超えた生命体『ドラゴノイド』だ」

覚えていたのは母が自分を抱きしめる姿と、自分が泣いている姿

「オレが……人間じゃない……？」

投げかけられた言葉に、シリアは歯を食いしばる。

「どういうことだよ！ オレが人間じゃないって！？ なにを根拠にいつてるんだ！ そもそもドラゴノイドってなんだよ！」

息を巻くシリアに対し、ジルは冷静に答えた。

「ドラゴノイドとは……人間がようやく二本足で立ち始めた頃、すでに存在していた生命体。それは自然の力を体内に取り込み、自らの力として扱うことが許された、天の存在、それがドラゴノイド。そして貴方は、自然の主ドラゴンの力を体内に取り込んだ、覇龍シリア」

「だから、その根拠はなんだってんだ！ オレは……人間だ！」

その言葉をさえぎるように、ジルは言った。

「今から十年ほど前……この世界でドラゴン捕獲計画が立案された。おそらく人間が、貴方の姿を見たからです」

「オレを……？」

「そう、覇龍は自らをドラゴンの姿に変化させる。それが覇龍の力だからです。そして貴方は右翼と背中を負傷し、キャノン砲でとどめをさした。そのさいに記憶を失った。そしてドラゴンから人間にもどった貴方をあなたの養母が発見した、ということでしょう」

ジルの言葉に、シリアは何も言い返せなかった。シリアは背中与右腕に大きな傷後がある。そして赤ちゃんのころの写真も、なんにも見せてもらったことがないのだ。

「オレは……人間じゃない……」

シリアの声は、重く、絶望に満ちていた。

「そう、貴方は人間ではない。やっと分かりましたか。人間界で迷った同胞を連れて帰る。それが私に課せられた任務です。貴方が人間にドラゴンとばれるのは、我々も心苦しいので」

ジルの言葉がまったく聞こえてないように、シリアはただ放心している。

その姿を見て、ジルは一息つくと言った。

「明日の十二時、近くにある公園で待っています。その間に、人間界でやり残したことを済ましてください。では……」

そう言い残し、ジルは一瞬にして消えた。おそらく高速で移動したのだろう。

ジルが消えてからも、シリアは抜けがらのようになっていた。自分が人間ではないということ、なにより、母が嘘をついていたということが、シリアにとってもなくシヨックを与えた。

「シリア〜ごはんできたわよ〜」

その時、シリアの後方で声が聞こえた。おそらく食堂でよんでいるのだろう。声が少しこだましている。

「わかった……今行くよ……」

シリアは小さくそう答えると、部屋を後にした。

すべてがひっくり返ったあの時間が、頭に残って離れない

食堂で夜食を食べている時も、シリアはそのままだった。

母が話しかけても反応せず、友達が話しかけても、まったく反応の色を示さなかった。

レンその姿を怪訝な表情で見ていたが、話しかけても無視される気がして、この日は一言もしゃべらなかった。

夜になると、シリアはまっさきに個室に行き、そのままベットに寝転んだ。今日は何も考えなくなかった。

「シリア」

ドアをの方から声が投げかけられた。見なくても分かる。母さんだ。
「……なに？」

シリアはそっけなく答える。今日はもう、だれとも話したくはない。

「今日、何かあったの？ おかしかったわよ、今日のシリア。なにが悩みがあるなら行って御覧なさいよ。母さんが相談にのってあげるから」

その言葉が癪に障り、シリアはギリツと歯を鳴らした。

「うるさいな！ 何母親ぶってんだよ！ 知ってんだよ、オレが捨て子だったことぐらい！ なんで……なんで隠してた！」

寮長は、しばらく呆然とシリアを見ていると、声を震わして答えた。

「な……なんでそのことを……」

「今はそんなことどうでもいい。なんで隠してたんだ」

「ごめんなさい。その事を言えば、シリアが傷つくと思って……」

「オレは！ 嘘をつかされていた方が…… よっぽどショックだったけどな」

寮長は、ぐつと口を紡ぐ。

「そんな、そんなつもりじゃなかったのよ。……ごめんなさい」

「ごめんなさい、か。それしか言うこと無いのかよ。もう、オレはあんたを母親とは認めない。じゃあな」

そう言っただけで個室を出て行くシリアの背中に、母親の鳴き声が聞こえた。すすり泣きだったが、はつきりとシリアの耳に聞こえてくる。それでも構わなかった。今はもう、何も考えられなかった。

「おい」

早歩きで廊下を進むシリアの背中に声が投げかけられた。レンだ。

「さっきの話、聞いたぞ」

「だから何？」

レンは大きく目を見開き、シリアの胸ぐらをつかんだ。

「何じゃねえよ！ お前……母さんになんてこと言ってたんだ！ 嘘をつかされたぐらいで

……」

「嘘をつかされたぐらいで？ そのことが、どんだけつらい事かわかんのかよ！」

レンの手を振り払い、シリアは玄関のドアに手をかけた。

「勝手にしろ！」

レンの叫び声が響くなか、シリアは孤児院を出た。

おさえきれない憎しみが悲しみへと変わっていく

孤児院から外に出ると、辺りは真っ暗だった。かろうじて見える景色は街灯のおかげだろう。

シリアに行く先などなかったが、とりあえず近くの公園に立ち寄ってみることにした。昔から公園が好きで、いつも行っていた。なぜだか知らないが、公園に行くと、心が安らんだのだ。

公園めがけて、シリアは足を進めた。耳触りな車の音が、シリアの横を何度も走りぬける。その音にまぎれて、子供が泣いている声がした。声ができる方に顔を向けると、何人かの人が、黒い服をきて集まっている。その片隅には、遺影らしきものを両手でもっている子供がいた。

葬式だ。

写真からして、おそらく母親の葬式なのだろう。それを見ていると、言い知れぬ思いがこみ上げ、シリアは足早にそこらを立ち去った。

公園につき、シリアはベンチに座った。

なにかが、なにかが頭の中に突っかかって離れない。それは、あの葬式を見たときからだ。

「……母さん、レン」

一言、そうつぶやいた。いまさらになって後悔している自分がいる。でも、もう戻れない。あんなことを行ってしまったのだ。

「どうしてオレは……うつ！」

その時、後頭部に衝撃が走った。そこを押さえながら振り向くと、高校生ぐらいの男が四人、シリアを見降ろしていた。

「おい、金よこせよ」

その中の一人が言った言葉で、シリアはすぐにこの事態を理解した。

「おい、無視してんじゃ……ねえよ！」

もう一人の男の拳が腹部に入り、シリアはうつ、とうめき声をあげ、その場にうずくまった。それを見た男達の笑い声が、シリアに降り注ぐ。

「……笑ってんじゃねえよ」

「あ？」

その言葉に男たちは眉をピクリと動かし、シリアの顔に耳を傾けた。

「なんだって？」

「笑ってじゃねえって……言ってるだよ！」

その瞬間に顔を上げ、男の腹部を力の限りに殴った。

「ぐおっ……」

そう小さく声を漏らした後、男は腹を押さえながらよろよろと歩き、力なく倒れた。

「つてめえ……なにしてんだ！」

もう一人の男が拳を握りしめ、シリアの横顔を殴りつけた。

シリアは半歩のけぞったが、腕を大きく振りかぶり男の頭めがけて振り下ろす。

「ごあっ！」

頭上を強打され、男はその反動で地面に顔面をぶつけ、動かなくなった。

シリアは残ったもう一人の男を睨みつけた。その顔は怒りにより、鬼　いや龍のそれに見えた。

「ひっ……ひい！」

なさない声をはき、男は走り去って行った。それに連鎖するよう、意識を取り戻した二人も背をみせ逃げて行く。

「はあ……はあ……はっ……」

小さくそう声をもらし、シリアの体が地面へと落ちて行った。

世界で一番大切なもの それは

「……リア……シリア！」

大きく体を揺さぶられ、シリアはうつすらと目を開けた。そのとき眼前に広がったのは、涙目で自分を見る母の姿と、その横で心配そうに見守るレンの姿だった。どうやらここはシリアの個室の中らしい。そのベットに、シリアは横たわっていた。

「母さん……レン……」

薄れた声で、シリアはそうつぶやいた。ゆっくりと体を起こそうとすると、全身が痛みにも包まれ、シリアは「うっ」とうめき声を挙げた。

「あなた傷だらけだったのよ。しかも全身。まだ動かないで」

「ほんとだよ。お前を探しに行ったら公園でお前が倒れてるんだからな。マジでびっくりした」

その言葉を聞いて、シリアの目が涙であふれそうになった。母さんにもレンにも、あんなにひどいことを言ったのに、二人は全く気にしていない様子だった。

「……ごめん」

ただ一言、そうつぶやいた。

「ごめん！ あんな、あんなひどいこと言って……もう遅いかもしれないけど……許して」

最後の言葉を行ったあと、シリアは耐え切れなくなり涙を流した。それにつられて、寮長も涙を流す。

レンは、涙が流れるのをこらえるように目を一度つぶると、シリアの目の前に拳を突き出した。

「ばかやろう。家族は、ケンカしたぐらいじゃ見捨てねえんだよ。分かったか？」

シリアは目をこすりレンに笑顔を見せると、拳と拳を打ちあった。

「ああ。ちゃんと頭の中に入れとくよ」

寮長はしばらくその光景を見た後、シリアに声をかけた。

「シリア、私はあなたのことを家族じゃないなんて、一つも思っていない。この孤児院にいる全ての人が、私の家族。この孤児院にいる全ての人は、あなたの家族よ、シリア」

「うん、ありがとう母さん。迷って迷って、やっとたどり着いたこの場所が、一番好きなんだ。もう迷わない」

「ええ、そうしなさい。あなた方向だから、探すのが大変なのよ」

三人はしばらく笑い合った。もう、あの夜の空気は消えていた。

「ねえ……母さん」

「なに？」

「家族って……いいね」

そのあと、シリアは傷をいやすために寝た。心の傷はいやんでも、体の傷はまだ治らない。しかし、心の傷がいったシリアにも、一つ不安があった。

ジルの存在である。

今の時刻は十一時。シリアに残された時間は少ない。その少ない時間で、どうすればいいのだろうか。

いちかばちか戦って追い返すか？ しかし、自然の力を取り込んだというドラゴノイドに勝てるわけがない。自分の覇龍の力というのも、どうやって解放するのか分からない。

結局どうすればいいのか分からない。不安が絶頂まで達した瞬間、シリアの頭の中に声が響いた。

『だいじょうぶだよ』

「……え？」

小さくつぶやき、シリアはがばつと布団から飛び起きた。近くに人がいる気配はない。呆氣にとられていると、またもや声が響いた。

『不安にならなくても大丈夫さ。使いかたは記憶が教えてくれる』

「使い方……！？」

『誓ったんだよね。もう、迷わないって』

頭にでんげきが走る。そうだ、誓ったんだ。もう迷わない。もう、家族を不安にさせない。

『人間として、生きるために』

シリアは拳を握りしめる。その顔はすがすがしい笑みを浮かべていた。

「ああ。その通りさ。人間として生きるために、戦ってやる……」
ベットの横にある家族の集合写真を見ると、シリアは言った。

「行ってくるよ　母さん、レン、みんな……」

窓を開け、外に出た。ここは二階の医療室。落ちればただではすまないが、そんなことはシリアには関係なかった。

スタンとまったく地面に着地すると、顔を前に向け走りだした。

『　そうだ、不安にならなくていい。恐れるなくていい。君は最高の力を持っている』

静かなる夜に たった一人の運命が定まろうとしていた

驚くことに、公園につくまで五分とかからなかった。まるで自分の脚力が何倍にもなったような速さが出ていたようだった。

辺りの静けさは、今から始まる戦いを見守るようだった。当然真夜中に人がいるはずは無いが、いつもにぎやかな時間と、どうしても比べてしまう。そんなことを思っていると、突然、背後に気配を感じた。

しかし、シリアはあわてる様子もなく、ゆっくりと背後を振り返った。

「きたな ジル」

心の中でそうつぶやき、鋭い目でジルを睨みつける。驚いたことに、恐怖感はまったくなく、シリアの心は落ち着いていた。今から命がけの戦いが始まるというのに。

その心の落ち着きは、先ほどベットで聞こえたあの声が起因していることは明白であった。
ドラゲル・クラウド

「いまからあなたを龍仙地へと連れて行きます。もう、想い残したことはないですね」

「だれが行くって言ったんだ？ 勝手にオレの選択肢を決めないでほしいな」

一瞬ジルは目を見開く。だが、すぐにいつもどおりの顔つきにもどった。

「断るということですか？ 残念ながらあなたに選択肢は無い。おとなしく龍仙地へ……」
ドラゲル・クラウド

「そのなんとかっていう所に行くっていうのも、オレに選択肢がないっていうのも、全部あんたが決めたことだ。オレの意見を、あんたはまだ聞いてない」

「ほう、なんだというのです。あなたの意見というのは」

シリアはニヤリと笑うと、右腕を突き出して、言った。

「戦ってやるよ。これからあんたのような奴が何度もオレを向かえにきても、戦って、倒してやるさ。あんたらが諦める限りな」

一瞬の沈黙が流れた。ジルは呆気にとられた表情でシリアを見たが、すぐにいつもの表情にもどった。

「そうですか……それがあなたの答えというわけですね」

つぶやくようにそう言うと、ジルはシリアに向けて右手を突き出した。

「ならば力ずくで、あなたをドラグル・クラウド龍仙地へとつれていきましょう」

その言葉が終わるか終わらないうちに、突き出された右手から光の様なものが集束され始めた。それは光というより、雷に近かった。

「神の鳴動流ボルザルク」

その声と同時に、集束されていた光　雷が、掌から一直線に発射された。

静かな夜に、雷の波が映し出された。

終わりのなき戦いがあるならば それすらも終わらせてしまおう (前書き)

完結です。

終わりになき戦いがあるならば それすらも終わらせてしまおう

辺りはジルが放った雷が地面をえぐられ、砂煙が舞いあがっていた。四方八方砂だらけで、辺りがまったく見えない状況でもジルは冷静に正面を見つめていた。

あの攻撃を避けられるはずがない。

ジルにはその自信があった。

しかし、辺りを覆ってた砂煙がはれた瞬間、ジルは思わず声をあげた。

「なに……」

目の前にはシリアが無傷で立って行った。突き出された掌には、先ほどジルが放った雷が握るような形で存在していた。

バチバチと掌に握られている雷が音を鳴らしてた。

無言でシリアはその雷を握りつぶす。ジルは少なからず驚いた様子で、目を見開いていた。

「貴様……今の攻撃をどうやって……」

そう声を放った瞬間、目の前にいたはずのシリアの姿が一瞬にして消えた。

「ちっ！」

瞬時にジルは後方に体を回転させた。そこにはシリアが空を舞い、拳を握り振りかぶっている。

ジルは右腕に雷を宿し、シリアの右腕がぶつかりあった。

その瞬間目に見えないエネルギーのような風が辺りを包み、砂が舞い上がった。

「口調が変わったな。驚いてるっていう目だぜ、それ」

「くっ……！」

拳と拳が離れ、再び辺りは静かになった。

「なるほど……あなた、力をもったのですね？」

「ああ、オレがどうすればいいのかも、力が……覇龍が教えてくれ

たよ」

「……少々侮ってましたね。次は油断しません……神の鳴動流！」

ボルザルク

同時に掌から雷の波動が一直線に発射された。一瞬のまばゆい光の後、その片隅によけつつシリアの姿が見えた。これとばかりにシリアに向けて発射する。

それも敏感に感じ取ったシリアは、間一髪大きくジャンプして避けた。

「にがしません！」

またもやジルの掌から雷が発射された。空中では避けられるはずがない。

だがシリアは、迫ってくる雷をよけるといふそぶりは見せていない。それどころか、逆に打ち勝とうとしているように見えた。

雷がシリアを包みこんだ。

勝った！

ジルは本気でそう思った。その時、

「おおっ！」

シリアの声と共に、雷が弾ける。ジルは目を疑った。その時のシリアの姿は

「覇龍……シリア……！」

まぎれもない、ドラゴンの姿に見えた。両手両足全に鱗のようなものがついており、爪は営利になっている。背中からは翼が生え、今も羽ばたいている。

驚いているジルだが、一番驚いているのはシリア自身だった。

内から闘争心がみなぎり、力があふれ出す。これが覇龍の、ドラゴンの力だった。

シリアは体を小さく縮め、一気に飛び出した。右手を振りかぶり、ジルに向かって突き出す。

ジルはそれを間一髪で交わした。しかし、すぐさま右腕から血が噴き出した。かすっていたのだ。

「くっ！」

ジルは一瞬その傷に目を向けたが、すぐにシリアに雷を放った。
着地したばかりのシリアは、体をひねって勢いをつけると、雷にむかつて右腕を思い切り振った。

「おらあああ！」

気合いをいれて叫び、その雷をジルに向かって跳ね返した。

「くそっ……」

ジルは小さくそうつぶやき、向かってくる雷を両手で押さえた。
しかし、勢いがかかった雷を押さえこむことはできず、次第に後退していった。

シリアは両手の付け根同士をくっつけ、ジルに向けた。

「もう一度言ってやるよジル。お前らが何度オレを迎えにきても、戦って倒してやるさ。あんたらが諦める限りな」

その言葉は、決着を意味していた。

「竜骨砲！！」

シリアの声とともに、掌からから竜のかたちを象った波動のようなものが放たれた。

ジルが押さえこんでる雷ごと巻き込み、それは爆発した。砂煙が辺りを覆う。

そんな中、ジルが姿を現した。満身創痍とはこのことで、右腕から緑の粒子のようなものにな変わっていき、空へと吸い込まれる。

「どうやらここまでのようですね。これ以上任務を続行できません」

ジルは消えて行く右腕からシリアに向きなおし、冷静な口調でいった。

「私が消滅しても、安心しない方が身のためです。私の消滅を知った同胞が、貴方を連れ戻しに来ます。そう、あなたが人間でいられる時間も、すぐそこまで迫っています」

その言葉を残し、ジルは消滅した。

シリアはすがすがしい笑みを浮かべると、空にむかつて右腕を突き出す。

「戦ってやるって言っただろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3867v/>

DORAGONOID《ドラゴノイド》

2011年9月23日03時29分発行